

次頁から

なにかを
内在 1639P

万1-155
「上り来る時」

4621? 3/12

4.624P-1/3

万1-155P
改訂上巻分

島門大宰府遺跡 万1-165P

そのままだに残っている。但し、博多湾北域をなす島と島、または島と陸地との間の瀬戸
名加の可能性もあろう。を見るとき、ふっと、神代の頃の二
とが思われる。「玄秘苑」へ島門、大宰府遺跡
鏡山猛、ニューサイエンス社、九員へ島門、参照
・神代とは、北九州・山口地方一帯を領有
ていた往古のことを指しているのであらう
3 淡海の海、夕波千鳥、汝が鳴けば、情も
のた、古思ほゆ、万巻三十二六六
12.5 近江に相当する、博多湾の海の
12.5 大甕、夕波に飛ぶ千鳥よ、お前が鳴くと心もうちな
びいて、一みと昔のことか思われること
4 もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波
の行く方知らずも、万巻三十二六四
・詞書に、柿本朝臣人麿、近江国より上り来
る時、宇治河の辺に至りて作る歌一首とある。
・柿本人麿は、博多湾から上ってゆき、大宰
府あたりの宇治河の辺においてこの歌を作っ
た、とも考え得よう。第503回「網代」参照
ともあれ、虚偽を内在した歌を、柿本人
麿は、雄大壮麗に、格調高く歌いあげたの
らう。公式の場合ではともかく、人

尾 柱 でない。

4.624^P - 2/3

・頁の上半分に大きくはみ出して

掲載

下2頁

(小2頁と
10からなり)



1404

第503図

あじろ いやまでら えんき
網代(石山寺縁起)

1304

『枕草子』日本古典文学全集11、1992年10月20日第二十二版発行、小学館、93頁参照、
冬、川の浅瀬に竹や木を編んだ「網代」を、網を引く形に立て、その端に簀を当て、魚を捕る。
『網代木』は、『網代』に用いる材のことである。(広辞苑)

うと疎ま 203[°]
ト

柿本人麿が

うたえん 林 賛嘆 929[°]
④ 4622-3/2

あはむ 欺く 31[°] 小林 843[°]

おめでた 表 329[°]
4,625[°]

場 榎 日本 168[°]
捧げる 882[°]

明哲 名
可定明で事理に通じている人
また、その人

● そんなー 周りの人々に疎まれたのは、いわ
ば当然のことであつたかも知れない。

● いかにかこの時代随一の歌人であらうとも

おもぬりこびへつらう 日 柿本人麿 のその名を

日 日本書紀 日 続日本紀 などの正史に載せ

るわけにはいかなかつたのだらう。

● 国史の編纂者たちの心の内にさえ 賛嘆

と輕蔑、相反することのようだけれども、こ

うした複雑な思ひがあつたであらうか。

● まーてや、柿本人麿の胸中の思ひは、察す

るに余りある。

● へおりおりの宮廷儀礼などの表立った公式の

場において、日本国土の美しさと、天皇国家

の繁栄とを、莊嚴華麗に歌いあげ、最大限の

賛辞を捧げること

● それか、この当時の宮廷歌人の務めだったので

あろうか、明哲な柿本人麿は、朝廷が企

ててゐる虚構を見抜いていたのであろう。

● それでまた悲しいことながら、柿本人麿は

あさきゆめみし
うねのおくやまけいこえて
わかよたれそつねならむ
いろはにほへとちりぬるを

いろは歌

*

読売新聞社、一〇五頁参照

ここらに、そのよってきたところがあるの
であらう。(一)日本の歴史(二)飛鳥と奈良、

齊藤茂吉のいう柿本人麿の渾沌、悲劇性は

である。

する矛盾の中で、柿本人麿は苦悶しているの

である。さき、一体誰が理解してくれようか。対立

虚飾に満ちた歌を作らなければならぬ苦

いだろうか。漂よって

一種暗い苦悩のひびきが感じられるのではな

そのため、柿本人麿の私的な作品には、

肌で鋭く感じ取っていったに違いない。

己が演じている行為の真の意味を、

つまり、悲しいことなから、柿本人麿は

柿本 34~39^P

4,628^P

理解
前級 75^P

柿本 30~31^P

誰にも気づかぬうちに最大の原因はなんで
の間にともかくとして今日までの長い間
七行書きに区切って書かれたと思われ当初
雄、現代日本社、二七三九頁参照
この『いろは歌』の暗号が、万葉かなで
有為の奥山今日越えて
浅き夢見し酔ひもせず
となり、この秀れた歌の作者が歌人としても
知識人としても当代第一流の人物であつたら
うくとは容易に察せらる。
『かし、もしもこの『いろは歌』の暗号
に、答なく死す』という暗号が隠されて
いるとしたら、この歌の作者は空海
という説は否定さるべきであらう。
『それでは、誰が『いろは歌』を作つたので
あらうか。それは定かでないが、もしも
いたら、柿本人麿であつたかも知れない。
『いろは歌』の中にみられる暗号は、
『く死す』は、柿本人麿の冤罪に対する無実
の叫びなのであらう。
という説がある。(以下、『柿本人麿の謎』栗崎瑞
雄、現代日本社、二七三九頁参照)
この『いろは歌』の暗号が、万葉かなで
七行書きに区切って書かれたと思われ当初
の間にともかくとして今日までの長い間
誰にも気づかぬうちに最大の原因はなんで

標本36^p

標本31^p

4,629^p

巻四 226^p 終綴 1226^p 標本 31^p
500^p

世人 1243^p
天つき 改行

あろうか。

①それは、この歌が実に美しく、覚え易く、内容的にみても「崇高な仏教の教え・人生の哲理」を格調高く歌いあげており、しかも技巧をこらした気配を感じさせないところにある。

②更に「そのうえに」何と「四十七文字の」かなを重複させずに歌いこんである」という驚くべき精緻さが、世人を感嘆させ、視点をやらせる大きな要因になったと考える。

まさに盛衰であり、生死の迫間に追いつめられ、人生を達観した者のみが作りうる歌であって、栄耀栄華に身を置いていける幸せな境遇の人間には到底作れるものではない。

獄中にあつて、きたるべき処刑を予感しながら死と対決してゐる者だけかなしうるゆゑであるといわなければなるまい。

なお、岡田希雄氏は、次のような見解を示している。

「作られた時代はかなり古くても、

H9.3.29 ㊥
H5.8.28 ㊥
→ 8.31.㊥

子心
孫布広2338
世に広く知られる

4.630^P-1/4 梓本28^P

こと

梓本36^P

何かの事情により、長らく人々の間に知られていなかったのだ。と言い、**『いろは歌』**は長い間秘密にされてきたため流布されなかったのだらう、と述べている。

『七行書』にさされたこの**『いろは歌』**の「香」を見て、往古の権力者達は人に知られることを恐れ、隠一つづけたのであろうか。

『四行書』が主流となって、**『七行書』**は行なわれなくなり、**『極秘』**に

しておく必要性がなくなったとき、世に広く知れ渡るようになったのかも知れない。

だが、**『いろは歌』**の頃には、誰か**『いろは歌』**を作ったのかさえ定かならな**『臆』**けになつてしまつていたのであろう。

*

4.630^p - 2/4

「いろいろは歌」の一部を墨書（すみか）きいた平安後期（へいあんこうき）

（11世紀末（むかし）は世紀前半（せいきはん）の土器片（どぎせん）が三

重（おも）い明（あ）和（わ）町の斎宮跡（さいぐうあと）で出土（うっしゅ）した（土師器（はじき）の破片（はくせん）

・表（おもて）に「ぬるをわか」裏（うら）に「つねなら」と

ある

・ひらがなで書かれたものとして「国内最（こく内さい）

古（ふる）の確（かく）認（にん）例（れい）という（写真（しやしん）図（ず）版（ばん）726 人（じん）斎（さい）宮（ぐう）跡（あと）「い

ろは歌」参照（さんしょう）で出土（うっしゅ）した

伊勢（いせ）神宮（じんぐう）に奉仕（ほうし）する斎王（さいおう）に仕えた女官（にようかん）が

文字（もじ）を覚（おぼ）え子（こ）練（れん）習（しゅう）として書（か）いた可能性（かのうせい）が（た）高（た）い

とみられ「朝日新聞（あさひしんぶん）」平成（へいせい）二十四

年（ねん）一月（いち）十八（じゅうはち）日（にち）へ最（さい）古（こ）「いろは歌（いろはが）」同（どう）一（いち）月（げつ）二

十（じゅう）日（にち）へ「天声人語（てんしやうじんご）」参照（さんしょう）

（X）

4,630^P-3/4^A

- ・カラー
- ・頁の上半分に
大きく掲載
下さい。
- ・A・Bの寸法
(間隔)を
一定にして
下さい。



11QG- (土器の外側)

(土器の内側)-11QG

13QG 中心のかけ

14QG 写真図版 226 斎宮跡 で出土した「いろは歌」

『朝日新聞』平成24年1月18日(夕刊)〈平安時代〉三重で出土参照

12QG はは^{ふくざん} ちよ^{ちよけい} 復元すると直径約9cmになるという

柿本人麿の生 267 708年 48才で去とある
かみ 4632 全工 115 ④ 4621-2/2 人麿の死期について 4630-4/4
本①-125 3列のせ。

むねん 秘伝 2157 欺く 231 才知 860 856 雄大 4622 8行 ④ 4622-2/2 暇
あま 最期 未来永劫 2138

の域を出るものではない。(写真図版参照)

① 柿本人麿は、佐留(媛)という卑称で
でも呼ばれていたのかも知れない。

② つまり、柿本人麿(佐留)は、元明天皇の
和銅元年(七〇八)四月に、従四位下で卒し
たのではなからうか、
とも思われるが、いかしいうまでもなく想像

思われる無念の思いのほかには、何も、それ
らーい事情を知ることが出来ない。

■ 全く確証の無いことながらあえて述べる
① 柿本人麿は、佐留(媛)という卑称で
でも呼ばれていたのかも知れない。

② つまり、柿本人麿(佐留)は、元明天皇の
和銅元年(七〇八)四月に、従四位下で卒し
たのではなからうか、
とも思われるが、いかしいうまでもなく想像

の域を出るものではない。(写真図版参照)

時の朝廷から命じられた職務とはいえ、後
代の全ての人々を未来永劫欺き通す為己
の才知の限りを尽して数々の雄大莊嚴な歌を
作り、そのことにより我が身を責め、苦しみ
続けた柿本人麿は、―――最期には、咎なく
て死んでいったのであろうか。

■ それにしても、一体、柿本人麿の身に何が
あつたというのだろうか。

■ いろは歌の「当に密かに隠された」と
心の内

④ 4626 15行 勤め

榎本八郎の謎 19頁
157頁

榎本八郎の謎 158頁

ぼてい
4,631 P-1/6

あかつち、ことば
電 天地の詞
ゆわう
硫黄

天地の歌

榎本八郎が作ったと思われ、天地の歌の中に、暗号らしいものか折り込まれてい

るようだが、以下、榎本八郎の謎

栗崎瑞雄、現代日本社、昭和五十六年三月五日第三刷一五六一六一頁一七五頁

あめつち、ことば 天地の詞 参照

やまかは 山川 峰谷

くもきり 雲霧 空苔

ひと いぬ うへ すえ 人犬 上末

ゆわ ざる 硫黄 猿

おふせよ えのえを なれぬて

この「天地の歌」の「前段」部分は「二字づつ

になつていて、漢字をあてはめることがで

るのか分からない。まるで、付けたか

ように見える。(*)へ生ふせよく、榎の枝をく

榎原央憲は、(中略)この最後

榎本八郎の謎 157頁
榎本八郎の謎 158頁
榎本八郎の謎 159頁
榎本八郎の謎 160頁
榎本八郎の謎 161頁
榎本八郎の謎 162頁
榎本八郎の謎 163頁
榎本八郎の謎 164頁
榎本八郎の謎 165頁
榎本八郎の謎 166頁
榎本八郎の謎 167頁
榎本八郎の謎 168頁
榎本八郎の謎 169頁
榎本八郎の謎 170頁
榎本八郎の謎 171頁
榎本八郎の謎 172頁
榎本八郎の謎 173頁
榎本八郎の謎 174頁
榎本八郎の謎 175頁
榎本八郎の謎 176頁
榎本八郎の謎 177頁
榎本八郎の謎 178頁
榎本八郎の謎 179頁
榎本八郎の謎 180頁
榎本八郎の謎 181頁
榎本八郎の謎 182頁
榎本八郎の謎 183頁
榎本八郎の謎 184頁
榎本八郎の謎 185頁
榎本八郎の謎 186頁
榎本八郎の謎 187頁
榎本八郎の謎 188頁
榎本八郎の謎 189頁
榎本八郎の謎 190頁
榎本八郎の謎 191頁
榎本八郎の謎 192頁
榎本八郎の謎 193頁
榎本八郎の謎 194頁
榎本八郎の謎 195頁
榎本八郎の謎 196頁
榎本八郎の謎 197頁
榎本八郎の謎 198頁
榎本八郎の謎 199頁
榎本八郎の謎 200頁

柿本人麿の謎 1/195 ①1895-3/4 柿本朝臣表 ④4618 ⑤4621 ⑥4631-26 ⑦4621-72 ⑧4621-72 ⑨4621-72 ⑩4621-72 ⑪4621-72 ⑫4621-72 ⑬4621-72 ⑭4621-72 ⑮4621-72 ⑯4621-72 ⑰4621-72 ⑱4621-72 ⑲4621-72 ⑳4621-72 ㉑4621-72 ㉒4621-72 ㉓4621-72 ㉔4621-72 ㉕4621-72 ㉖4621-72 ㉗4621-72 ㉘4621-72 ㉙4621-72 ㉚4621-72 ㉛4621-72 ㉜4621-72 ㉝4621-72 ㉞4621-72 ㉟4621-72 ㊱4621-72 ㊲4621-72 ㊳4621-72 ㊴4621-72 ㊵4621-72 ㊶4621-72 ㊷4621-72 ㊸4621-72 ㊹4621-72 ㊺4621-72 ㊻4621-72 ㊼4621-72 ㊽4621-72 ㊾4621-72 ㊿4621-72

の一行を除外すると、日猿が最後の話とな
 っている。
 へこれは、柿本（注）原本に、こう書いてある。猿すなわち柿本人麿の名で
 ある。
 と推理！
 柿本人麿が暗号の中で署名して
 いると考えた。
 （天武紀十年十二月二十九日条へ柿本臣（かきものものおみ）猿
 という字）
 今となつては確認する手段など
 この物語では、
 元明天皇の和銅元年（七〇八）四月に従
 四位下で卒した柿本朝臣佐留（猿ともいう）
 は、
 と解釈したい。
 柿本人麿（かきものものおみ）なのだろう。
 柿本人麿の顔容が猿に似ていたという
 けでなく、別名（醜名）が日佐留（猿）
 だった。
 と推察される。
 （第二十七章へ卑称）の項。

603 ④464-2/2 柿本 709~710年 ころ

言中リ 平成29年(2017)5月K、
心不 由4753. 何より「天に(望む)ト
..... H30.9.18日付 28ヤマにて

$$60\cancel{4} - \frac{1}{2}$$

前 後 603 10月 橘本佐留生、元明、和銅 前 員へ
元年(708)4月 卒した

③ 大^リと^いえ^ば 不^ふ比^ひ等^との^つ妻^ま 日^あ県^か大^の養^ち橘^の三^は千^な代^の凡^み

(光^{こう}明^{めい}皇^{こう}后^{ごう}の^は母^は) 一^い七^{しち}三^{さん}三^{さん}の^のこ^こと^とな^なの^のだ^だろ

う^う三^{さん}み^みか^か、^とも^も思^{おも}わ^われ^れる^る。(要^{よう}検^{けん}討^討)

三^{さん}千^{せん}代^{だい}は、^橘宿^{しゆく}福^{ふく}姓^{せい}を^を賜^{たま}っ^かて、^宮廷^{てい}に^に隠^{いん}然^{ぜん}

た^たる^る勢^{せい}力^{りき}を^を持^もっ^かて^てい^いた^たと^とい^いう^う。(広^{くわ}辞^じ苑^{えん}、他^た)

トル
←

4,631^p - 5/6

↑A
★ 白い点をトル

・カラー

・右頁の上。

・左右に限度一杯
はみ出して掲載
下さい。

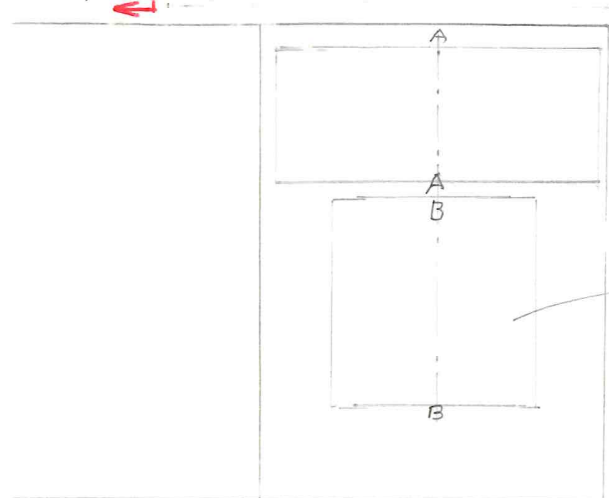
・背景の縦に括弧
無くし、主観に
しておいて下さい。



←

↑A

・上下の図表、中心ぶりわけにて下さい。



次頁

ゴキク

天竺の
並べて

古今集 165頁

左端上の賛は「梅の花／それとも見えす／ひさかた
のあまぎ（天霧）／雪の／なべて（並べて）／ふ（降）れ
ば」という人麻呂の歌。（古今和歌集（冬）334）

白い点をトル



・カラー
右頁の下に
限度一杯大きく
掲載下さい。
背景の縦じま（縞本）を
無くし、斜めに
斜めの線を
消して下さい。

〔拡大図〕

この省略

14GG-

第504図

柿本人麻呂像

狩野探幽筆（江戸時代初期）

13GG

出雲大社展 鳥根県立古代出雲歴史博物館 平成25年4月12日発行 200 263頁参照
猫背の姿 気だるそうな老いの表情 脇息に上半身をあずけて坐し 顔を伏せる。身体の流れ麗な描線がすばらしい。
60頁

天智紀制5年冬 ④4544 ④4633-72 441
天智紀制5年冬 ④4544 ④4633-72 441
天智紀制5年冬 ④4544 ④4633-72 441

4,632-1/2

同④4642 143 2099

④2732

④2735 4545P

④4633-72 259

崇福寺 (志賀寺・志賀山寺)

大津宮の乾(北西)の山中に

建てられたという天智天皇勅願のなる日崇

福寺(志賀寺とも、志賀山寺とも称される

寺)について、考察してみたい。

扶桑略記 卷五、天智天皇の条には、

「六年丁卯春正月。遷都近江国志賀郡大津

宮。本在大和国岡本宮」

と記されている。

尚、天智紀六年三月十九日条に「都を近

江に遷す」とあるから「正月」と「三月」どちらかの

記載に錯誤があるようにも見える。

「か」も「か」たら、

へ天智紀五年(六六六)の冬に、大和国

の岡本宮を後に「た皇太子中大兄の一行は、

翌年(六六七)の正月頃(近江国に相当する

筑紫国の姫大津宮に、一時お立ち寄りにな

(ほんのちよと)

④4642 1599

ナウ 682P
希有 不思議なこと

4,632-2/2 同 4642-1/2 乾元143P ④4641 厚文
ニューサイエンス 「大津京」 55 いぬい 寝る 313P 小林P
天智略記 60P

った ✓
といった意味なのかも知れない。
因^①ソ^②ー^③て^④扶桑略記^⑤ 卷五、天智天皇^⑥の条に
は、更に^⑦続^⑧けて、こう記^⑨されて^⑩いる。
天智^⑪六年^⑫二月三日、天皇^⑬（事^⑭実^⑮は皇
太子^⑯中大兄^⑰）が^⑱大津宮^⑲に^⑳お^㉑いて^㉒寝^㉓つ^㉔て^㉕お^㉖ら^㉗い
た^㉘時^㉙、夜^㉚半^㉛の^㉜夢^㉝の中^㉞に^㉟法^㊱師^㊲が^㊳現^㊴わ^㊵れ^㊶て、
宮^㊷の^㊸乾^㊹（北^㊺西^㊻）の^㊼山^㊽に^㊾一^㊿つ^㊽の^㊾靈^㊿窟^㊽が^㊾あ^㊿る
早^㊽く^㊾表^㊿に^㊽出^㊿て^㊽見^㊿る^㊽か^㊾よ^㊿い^㊽ ^㊾
と^㊽お^㊿告^㊿げ^㊽に^㊽な^㊿つ^㊽た。
驚^㊽い^㊿て^㊽目^㊿を^㊽さ^㊿ま^㊿ー^㊽た^㊽天^㊿皇^㊽が、教^㊿え^㊽ら^㊿れ^㊽た^㊽方^㊿
角^㊽を^㊿見^㊿て^㊽み^㊿る^㊽と、一^㊽一^㊿一^㊽火^㊿の^㊽光^㊿が、細^㊽く^㊿高^㊿
く^㊽十^㊿余^㊿丈^㊿は^㊽かり^㊿も^㊽立^㊿ち^㊽昇^㊿つ^㊽て^㊽い^㊿て、火^㊿焰^㊿が^㊽あ^㊿
たり^㊽を^㊿広^㊿く^㊽照^㊿ら^㊿し^㊽て^㊽い^㊿た。
こ^㊽ゆ^㊿は^㊽希^㊿有^㊿な^㊽こ^㊿と^㊽（不^㊽思^㊿議^㊿な^㊽こ^㊿と^㊽）だ^㊽と^㊿大^㊿
伴^㊽連^㊿桜^㊿井^㊿な^㊽ど^㊽を^㊿召^㊿し^㊽、こ^㊽の^㊿奇^㊿幻^㊿な^㊽現^㊿象^㊿を^㊽見^㊿せ
る^㊽と、皆^㊿こ^㊿と^㊽こ^㊿と^㊽く^㊿驚^㊿嘆^㊿し^㊽た。
さ^㊽つ^㊿そ^㊿く^㊿翌^㊿日^㊿、天^㊿皇^㊽は^㊽自^㊿ら^㊿そ^㊿の^㊽地^㊿に^㊽赴^㊿か^㊿い
り、修^㊽行^㊿僧^㊿が^㊽お^㊿経^㊿を^㊽念^㊿じ^㊽て^㊽い^㊿た。

4,633^P - 1/2

④ 4635^P 157
11月
23日

天皇が、この僧に、

曰この地は、いかなる名前ぞ

とお尋ねになると、僧は、

曰古仙靈窟伏蔵地。佐々名実長良山と申し

ます

と答えて、忽然と姿を消してしまつた。

そこは、林樹森々、谷深巖峻、流水清涼、

寂莫閑空といった、仏教に帰依する寺院の建

立には、まさにうってつけの地であつた。

そして翌年の天智七年正月十七日、この地

に崇福寺が建立された

という。↑↑↑↑ (「大津京」林博通、二ユ

ーサイエンス社、五五頁参照)

*

④ 4632^P

④ 4631^P

4,633^{P-2/2}

④ 4542^P
④ 4544^P

④ 4632^{P-1/2} 17行へ
④ 4544^P 4行各

④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

たのだらう、と思われ、

●天智称制五年（六六六）冬に、倭国へ大和

国一の岡本宮を後にして、奈良の山を越えた

皇太子中大兄の一行は、淀川支流の泉川（木

津川の古称）を下り、瀬戸内海を西へと漕ぎ

進んだのであろう。（第八十三章へ中大兄、

大和国から娜大津へ向かうの項参照）

●翌年の天智称制六年（六六七）正

月、一時、中大兄は娜大津宮へお立ち寄り

になったのか、知れない。（扶桑略記）卷

五、天智天皇条参照）

●その直後の二月三日、中大兄が娜大津宮に

おいで寝つておられる時、夜半に法師が現れ

れたのであろう。（扶桑略記）卷五、天智

天皇条参照）

●中大兄は、その後、大倭国（肥後国）の都

方へ上って行かれたとであらう、と解され

る。

と告げ、
――
そして、その翌年の天智七年

④ $4633^{\circ}-\frac{1}{2}$ 4.634°

⑦ 4553 P-1/2

20

④ 4549 - $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{4}{4}$

（第八章）高市天皇崩の項において既述

中大兄 (天智天皇) は即位された。
 今小は天

智ち稱しやう制せい六年三月のこたうたのであらう。(紀)

● その当時、玄海灘は下なり緊迫した状況で

天智天皇は、即位した

の同い月い
つまり天智
祢制六年三
月の十九日

都を（近江に相当する）筑紫の娜大津へ

遷
さ
小
た
と
推察
さ
小
る
（紀参照）

はうするに

なかのおほえ
てんちようせい

皇太子中大兄は天智初年六年（六六七）
 三月から二月の間にハナサセテ（イ）
 都（イ）
 三月から二月の間にハナサセテ（イ）
 都（イ）

正月 二
 二 月 二
 三 月 二
 四 月 二
 五 月 二
 六 月 二
 七 月 二
 八 月 二
 九 月 二
 十 月 二
 十一 月 二
 十二 月 二

大後園(昭後園)へ行く途中

てんちじうせい
463-358
たわの

天智元年六月二日
 皇太子中

千の毒の中へ法師から見
 方戸た女が泣き宮に寝て
 下おらん水と
 夜

宮の北西の角に二角の現水

壺の土
 西の山
 へ
 夫
 壺
 眞
 の山
 へ
 け
 一
 一
 の
 壺

→ H5.9.2(木)⑤
H9.3.29(土)

大津京 55°
寺門は、園城寺の別称である

4,635P

天智
改訂

万4-55P
改訂 2行アキ

北九州の形 5万の地図 福岡・津屋崎
④ 4633-1/2 流木書庫

正月十七日、志賀島の山中に、崇福寺に、
賀寺・志賀山寺が建立されることになった

のであらう、と想像される。

筑前国の志賀島には一八〇メートル程の山が聳え、その四周に細い小川が幾筋も流れ下り、不動の滝・四十回所霊所などがあり、数多くの史跡や遺跡が散在している。志賀の山は、いまだく大な伐りや荒雄らがよすかの山と見つつ、億はむ、(万十六一三八六二と万葉集によまゝに記す)の志賀の山は、沖の方から入港の船の目標になつたという。

(一) 北九州の旅、旅研社、九六頁。「萬葉集」(四) 日本古典文学大系、岩波書店、一五五頁。注記。五万分の一地図等参照。

崇福寺は、志賀寺とも呼ばれた。山寺とも呼ばれた。今昔物語には、天智天皇建志賀寺語として、崇福寺と云ふ是也となむとある。(二) 寺門伝記補録には、国史中々以崇福寺謂志賀山寺世上呼曰志賀寺」と記されている。

寺門は、園城寺の別称である。

次頁109

扶桑 60' 66'
大友皇子は大友皇子の命
大友皇子の命

④ 2733¹ - 2/2 同 4.636¹

次頁 5~104

④ 4633¹ 2/2 873³

161(扶) 4640

大津京 132¹
扶桑の略記 66¹

(朱鳥元年) 糸参照)

三 拾芥抄には、崇福寺を挙げて、「号志
 賀寺」と説明している、
 という。(「大津京」林博通、ニユー・サイ
 エンス社、五六頁参照)
 天智七年(六六八)正月十
 七日、筑前国志賀島に建立された日崇福寺は
 (志賀寺・志賀山寺)は、―――そのゆずか
 五年後の天武二年(六七三)、すなわち壬申
 丑(六七二)の翌年、早くも志賀島での
 存続を許されず、志賀島に地理的に相当する
 所、近江国(滋賀県)志賀郡へ移された
 のであろう、と思われる。
 ① 園城寺縁起や日扶桑略記など幾つか
 の文献によると、
 「大友皇子の子大友与多が家地に日崇福寺
 を移して創建したのが日園城寺(三井寺)
 である」
 という。(「大津京」林博通、ニユー・サイ
 エンス社、一三二頁。「扶桑略記」天武十五年

小林 660P
 著 831P
 長良 大和 55P
 弘文 757P
 5206P
 5206P
 5206P

4,637P

② 日本社寺大観 寺院編、名著刊行会
 三井寺 (園城寺) の項にはこう述べる

「正しくは長等山園城寺と号し、専ら三井寺 (御井寺) の称を以て著る。天武天皇二年 (六七三)、弘文天皇 (大友天皇) 皇子大友與多王、父天皇 (大友天皇) の遺詔により奏請して天皇舊御所に寺を建立し御井寺と號し、大友氏の氏寺として子孫に傳ふと。

朱鳥元年 (六八六)、造営の工畢る。

③ また貞観年間 (八五九〜八七七) に

天台別院とされたのであろうか。

「園城寺は、現在天台宗寺門派の総本山である。

この寺の由来について天台座主記などに、貞観年間 (八五九〜八七七) 志賀郡

領大友黒主、大友夜須良麻呂らが寺を智証大師丹珍に寄せ、天台別院として興した、ことが記されている。

という。(「大津京」林博通、ニュー・サイエンス

一三二頁参照)

4,638

奇き 小鉢 275° 好 電カウ
銅鐸 11° 崇福寺の銅鐸 このききろ
令 小鉢 60° ④ 2732° ~ 2735° 「大津宮」 55° 扶桑略記 60°

巨大な銅鐸の出土

とすると、日 扶桑略記 卷五、天智天皇
条に記されてゐる次の記事は、どう理解し
たらよいのだろうか。

七年戊辰正月十七日。於近江國志賀郡。
建崇福寺。始令平地。堀出奇異寶鐸一口。高
五尺五寸。又堀出奇好白石。長五寸。夜放光

明とある。

つまり、

(六六八)

天智天皇七年正月十七日、近江國志賀郡
に於て、崇福寺を建てたが、地ならし作業
中に奇怪な形の銅鐸を掘り出した。測ってみ
ると、高さが五尺五寸(約一丈六尺六寸)もあ
った。付近を注意すると、こゝまた奇妙な形
の約十五倍ほどの長さの白い石が、引き続い
て出てきた。その石は、夜のなると不思議な

とくに、暗闇の中で光明を放った
というのである。

もつとも、小さな銅鐸ならともかく、

へ五尺五寸（約一メートル六分）もある巨大な

銅鐸が、博多湾の出入口に浮かぶ。志賀島は

ら出土する。

ななどということは、まず有り得ないように推

察される。

筑紫の志賀島は、——大型化した銅鐸を

盛んに作り続けた中国・近畿地方を中心とする

る。銅鐸文化圏の外にあるからである。

あるいは、この扶桑略記の記事は、日

本書記の手法と同様、

へ二つの似たような事柄を、あたかも一つ

のことであるかのように、まとめて書きこ

している。

のではないだろうか。

もーかーたら、次のようは解釈してみ

要があるのかも知れない。

天智七年（六六八）正月十七日、筑前国志

④ 4637

⑦ 4637^P
 4636^P

4,640

$$\begin{array}{r} 673 \\ 668 \\ \hline 5 \end{array}$$

1か1ちあふ

抗 ④ 4632^P 8行

⑦ 4636 $\equiv y$

賀島の山中に、
宗福寺が創建された。

壬申乱

（六七二）に勝利して天皇位についた

たのは、大海人皇子（天武天皇）であつた。

天武朝となつた時、

い え 志加貝島に存続させ

天智天皇勅願の寺であるとは

の存続を認め

3
わ
け
に
は

い
か
な
い

山宗福寺
は

ということになった。

し
か
し
な
か
ら

大友天皇の皇子である大友

與多

すうふくい
手は、父天皇へ大友天皇への遺詔により

山宗福寺に受け継ぎ、中つゆかなけ

水
ば
な
ら
な
い
▽

と	思	フ	友	6
---	---	---	---	---

●
その
で、大友與多は、
天武二年（六七三）

に奏請。

近江国に相当する筑前国の
小宗福寺

近江国へ移した

と 願 一 大

念履かかない、大友與多は、

筑前国
の志賀
真に地
勢的に
対応し、
その名も

右に所
つ
まり
の
近
江
国
の
志
賀
郡
に

④4632 訳文

「と=うて」④4621^{1/2}
④4658

4.641^P

④2732^P〜3^P

ほうなく かん
寶鐸 627^P ④4638⁹
④2733

④4636^P

④4636^P
1699

④4636^P
1799

ある家地へ、口崇福寺口を移して創建した。

●ところが、その地ならしの作業中に、高き

五尺五寸（約一丈六尺）もある、一丁口寶

鐸口（堂塔などの軒にかける大形の風鈴）に

似た奇怪な形のものの一口を掘り出した。また

長さ五寸（約十五分）ほどの白い石を掘り出

した。この石は、夜に光った、

といったような経緯があつたのであろう、と

想像される。（第四十五章へ母国の銅鐸の終

焉の項におりて概略を既述）

＊

崇福寺を乾（北西）に望む大津宮

ところて、口扶桑略記口卷五、天智天皇六

年条には、

「二月三日。天皇寝大津宮。夜半夢見法師

来云。乾山有一靈窟。宜早出見。天皇驚寤

出見彼方え山。云々」

とある。

④扶桑略記口頁ノ行ノ宜とあるが、
大正198に宜は無い。大正194に宜がある。

寶鐸 見てもよい。④4638⁹

「大津宮」 44^p 今昔 (自注) 今昔物語 ④4635^p 末4行にも
(1)-180^p 末 847^p

4,642^p

三井寺 ④4631^p 23行 ④4632^p 83行同文

■つまり、大津宮で寝ておられる中大兄の夢
に、法師が現われ

「宮の乾(北西)の山に一つの霊窟がある。

早く裏に出て見るがよい」

と告げた、という。(第八十四章(崇福寺)の項に

■そこで、いつの頃からか、

へ近江国志賀郡の崇福寺(今の三井寺)の

裏山である「長等山」を乾(北西)に望むと

ころ、琵琶湖最南岸の「栗津」に大津

宮があった

と人々は考えるようになったのかも知

れない。

①早くも、平安後期、嘉承(一〇六二)以後間も

ない頃に成立した「今昔物語集」巻第十一、

天智天皇建志賀寺語第二十九に

「今昔、天智天皇近江ノ国、志賀郡、栗津

ノ宮ニ御マシケル時ニ、云々」

とある。

②また、中世の史書「帝王編年記」には、

「六年丁卯。遷都近江国滋賀郡大津宮。或

同文 ④4632^p 10行

4,643^P

云粟津^{いあはづ}
とある。

■すなわち、

へ大津宮^{おほつのみや}は、三井寺^{みついでら}（崇福寺^{すうふくじ}）の南東、粟津^{あはづ}にあつた。

と解釈^{かいしゃく}し得^うる記述^{きじゆつ}を行^{おこ}なつてゐる。

■しかし、現在^{げんざい}、大津宮^{おほつのみや}＝粟津^{あはづ}とする見解^{けんかい}は疑問視^{ぎもんし}されてゐる。（「大津宮」林博通^{はやしひろみち}、ニユー・サイエンス社、四四頁参照）

*